

論 文

文学者としての新村出 ―短歌、そしてやまぐち―

安 光 裕 子

一 はじめに

著名な言語学者・国語学者であり、『広辞苑』の編者である新村出¹⁾は、明治九年（一八七六）十月四日、関口隆吉と静子の次男として生まれた。関口家は代々今川家に仕え、のちに徳川家の旗本となった。父隆吉は、明治政府に仕え、第二代県令として山口に赴任した。このときに新村は、山口の地に生を受けたのである。氏が関口から新村に変更したのは、明治二十二年（一八八九）十二月二十日、十四歳のときに、新村家（養父の新村猛雄は、徳川慶喜公の家扶）の養子となってからのことである。

長じて新村は、明治三十二年（一八九九）に東京帝国大学文科大学を卒業する。その後、同大学の助手に任せられ、助教となり、京都帝国大学文科大学助教に転任して、同大学教授となり、退官するまで言語学講座を担任し、近代日本の言語学の発展に寄与した。その功績により、文化勲章が授与され、京都名誉市民の表彰を受けた。

新村は、西洋の言語理論を導入して日本の言語学・国語学の確立に努め、なかでも国語史や語源、外来語、南蛮文化に関する考証など多方面にわたり業績を残している。また、百科事典の要素を併せもつ便利な辞典として今日まで広く利用されている『広辞苑』の編集をしている。これらの業績から、新村については、言語学者・国語学者の面から論じられることがほとんどであった。

これまでの新村研究は、このような傑出した業績の面に強い光があてられてきたので、文学者としての面は陰となり、背景に沈んでいた。新村は、言語学研究の傍ら、『重山集』や『牡丹の園』などの歌集や『南蛮更紗』などの随筆を執筆しており、そのうち星座や語源に関する随筆など三十点は、柳田國男や吉村冬彦、齋藤茂吉の著作とともに『現代日本文学全集』第五十八篇²⁾に収録さ

れている。

そこで、本論文は、ほとんど論じられてこなかった文学者としての新村出に焦点を合わせて論じることにする。また、新村の年譜³⁾には、「山口県山口町道場前、一ノ坂川左岸辺に生まる」という記載はあるものの、新村とやまぐちについて真つ向から論じたものが見当たらないので、やまぐち生まれの新村出という側面も合わせて論じることにする。

二 文学者としての新村出

平成十八年（二〇〇六）に出版された『やまぐちの文学者たち』⁴⁾には、山口県出身または山口県にゆかりのある、近代以降に活躍し、既に亡くなった文学者の中から、やまぐち文学回廊構想推進協議会が選定した文学者、すなわち宇野千代、金子みすゞ、国木田独步、種田山頭火、中原中也や与謝野鉄幹など六十三人の文学者が収録されている。その後、同協議会は新たに十七人を選定して、『やまぐちの文学者たち』の増補版が平成二十五年（二〇一三）二月に発行された。新村出は、その中のひとり選ばれた。

新村は、前述のように、ほとんど触れられることのなかった文学においても造詣が深い。本論文では、文学、なかでも短歌に絞ることにする。

新村が在世中に編んだ歌集には、『重山集』⁵⁾、『雨月』⁶⁾および『牡丹の園』⁷⁾がある。遺歌集として『白芙蓉』⁸⁾があるが、これは、新村の一周忌にあたる年に、前述三歌集以後の作品中からその一部を抄出したものである。

長男の新村秀一氏ら遺族による『白芙蓉』のあとがき⁹⁾には、「父の遺しました和綴じの帖面は九十六冊ございまして、墨書の詠草が毎日ぎっしり書き込まれてあります。これから見ますと、最近十年間の歌だけでも恐らく数万首に

のぼるのではないか」とあり、また、これらとは別に「メモ帖三百冊もございまして、それらにも一々題名」がつけられ、「歌のおぼえ」、「広辞苑備忘録」、「新月と明星」など多岐にわたっているという。新村は膨大な数の、しかも多種多様な短歌を遺しているのである。

新村が歌を学びはじめたのは、早くて十五、六歳、静岡中学校の上級生のころで、静岡の三浦弘夫氏（浅間神社の宮司）によって歌学の初歩を『古今集』の序文の所説にしたがって聴講したのがそのはじまりであった。新村は、中学校の同窓生のなかには歌友が一人もおらず、富士山を見たり、三保松原に遠足に行ったりするなど自然に接しても、なんらの歌心はわかかなかったと述べている⁽¹¹⁾。また、明治二十五年秋十月、センチメンタルな年ごろの十七歳の一文学青年（新村）は、落合直文を師範と仰いだ歌の小集会に出席し、芭蕉の「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」にヒントを得て詠んだ「枯枝にとまれるからすうちながめ物思ひをればひびく鐘のね」に対して、落合直文からは「コレはハア、発句のヤキナホスだけでハアなんともかとも成ったもんでねエ」という口調で、「一刀両断、一言のもとにこの作を罵倒され」たと、「私の歌歴自叙」に記している⁽¹²⁾。とはいっても、新村は、落合直文によって『土佐日記』を第一に、ついで『枕草紙』、『増鏡』と次第に国文学に永く引き入れられ、歌風の敬慕についても、落合からかなりの感化を受けており、その感化は深く提撕^{ていし}を受けた佐佐木信綱に近しくするまでは強かったと述べている⁽¹³⁾。

新村は、老年になってから詠んだ道学的な歌や慨世的な歌は、実父の関口齋（隆吉）と養父の新村猛雄の歌道のうえからの影響ではなく、両父の遺風または庭訓にもとづくものだ⁽¹⁴⁾と述べている。

また、『古今和歌集』や『新古今和歌集』から、ものの感じ方、ものの見方、発想法を得て新村は、ともすれば古今情調に傾きがちであり、紀貫之流の洒落に墮してゆくおかしさと記しており、自分の歌道には『古今和歌集』前後の規範が冥々のうちに支配していると述べている⁽¹⁵⁾のである。

新村の歌道の歩みは、「休み休み、ぶらぶらしながら、とくに師承というべきものなく」、「歌集歌誌、さては歌道の先進先蹤、あるいは追隨、あるいは反抗、あるいは自省、あるいは自判」、「いわば我流またおのがじしの自己流」であった。「ときには保守、または伝統墨守、ときには模倣ないし規範従順」、「己を知り、己を好み、初めから主義とか主張とかをもち、独歩、独楽」、

「流派に属せず、単に古今を師として、天を仰ぎ、孤負もせず、和協をもつべらとなし」とも述べている⁽¹⁶⁾。それは、「善良なる凡人たらんことを期するだけ」という、新村の一貫した信条の表れであったのである。

国語学者であり歌人の土岐善磨は、『新村出全集』第十五巻の短歌篇の解説を書いている⁽¹⁷⁾。そのなかで、新村が『重山集』の後語に「着想も格調も陳腐にながれ、簡古平板、鍛錬を加へぬままの、うぶなあまい作品ばかり」と述べているなど、他の歌集『雨月』や『牡丹の園』においても謙虚な自省を書いていることに対して、土岐は、「そうまで自虐的になられるにはおよぶまい」と言いつつも、「これは、明治の初年に生れて大正、昭和のきびしい時代を正しく生きぬいて来られた先生の、老教養人としての保守性と、進歩性、向上性との交錯した心情として、その歌文のほとんどすべてにわたり、うかがい得るところであろう」と述べている。また、新村の一貫した信条を表すために、「つねに四恩を説いて、その体得のうちに、不断の努力をかさねられたのである」とも述べている⁽¹⁸⁾。

そんな新村は、「私の歌歴自叙」の中で、「私の歌心をそだてて」、「歌の歩道にひっぱってきた」のは、昭和七年（一九三二）の春夏にかけての西欧三渡のうちの第一の歌、一遊数百首の吟詠であり、この旅行がなかったら、天は自分をここまでの歌境にまでおぼせてくれなかっただろうと述べている。すなわち、昭和七年の西欧訪問が新村の歌道に某かの影響を与えたと言えよう。以下の短歌は、昭和七年（一九三二）にフランスに赴いたときに詠んだものである。

遊欧詞藻 昭和七年

マルセイユみなどの町をむらがりて五月の空をつばくらめ飛ぶ⁽¹⁹⁾
月冴ゆるセイヌ河ぎし風ありてほのかに見ゆるエフェルの塔⁽²⁰⁾

『新村出全集索引』の年譜（以下、「年譜」とする）によると、渡欧の行程は、昭和七年（一九三二）の「四月八日 靖国丸にて神戸出航渡欧」、「五月十一日 仏マルセイユ着。十二日 巴里に入る」、その後、巴里を起点に、ブリュッセルや倫敦、伯林などを回り、七月二十日 巴里よりマルセイユに入り、二十二日 諏訪丸にてマルセイユ発 八月二十六日 神戸に帰着するのである。

この二首は、その頃のマルセイユやパリの情景を詠んだ歌である。新村が主に歌の題材に選んだのは、常日頃愛でた草花や星などの自然界であった。泰山木と松かさ、オリオン座を詠んだ歌がある。

すだれ越しに真白に見えて薫りくる泰山木を妻に讃へつ⁽²²⁾

松棊^{まつなま}を掌弄^てして

家づとに孫がもたらす松かさをわが掌上に受けてほほゑむ⁽²³⁾
をちこちの松かさの数あつまるは何すともなく楽しきものを⁽²⁴⁾
オリオンの星座さやかにかけられるに美しきかも木星たかく⁽²⁵⁾

新村は、「わが愛樹の随一に、常緑の花樹のタイサン木がある⁽²⁶⁾」と述べているように、泰山木をこよなく愛し、自宅の庭に植えていたくらいである。新村の自宅は、現在、新村出記念財団重山文庫となり、言語学・国語学の関係資料を広く研究者の利用に供するとともに、さらに資料を充実して、国語研究の進展に寄与する目的で開館している。いまま重山文庫の庭には一本の泰山木があり、晩年病床にあった新村は、縁側まで移動させて、白い花をつけた泰山木を眺めていたとのことである⁽²⁷⁾。

また、新村がこよなく愛したものに、松かさがある。「ぼくが松かさを愛し且集めたのは、むろん老年以後のことだが」と前置きして、「自分の境遇を反省してみると、実が、種子が、すでに風に飛ばされて、枯れ落ちてしまつて、地上、草上、苔の上などに横なり豎なりに、逆かさなりに、ころがつて平然軽妙たるありさまな所が、悟りきつた雅趣があつて面白と思つて」、あちらこちらから拾つて来ては、机上や床の間に置いて、「折々は掌上に玩弄して、捻華微笑的に独り自ら楽ミたのしんだ」と「松笠今昔談」で述べている⁽²⁸⁾。

新村の孫の新村祐一郎氏は、新村出記念財団設立二十五周年記念文集『泰山木』の中で、「晩年は『自然に逆らわず』ということをもットとしていたように、多少風流な言い方をすれば花鳥風月を伴侶とする日々⁽²⁹⁾」を過ごし、また、星をこよなく愛しており、なかでも宵の明星を愛でたと述べている。孫の新村恭氏もまた、「祖父はいつも悠然としていて、散歩をしながら自然を見るのが好きでした。草花や星などにも詳しく、専門家はだしの説明をしてくれたこと⁽³⁰⁾」もあると述べている。

新村が歌の題材に選んだのは、草花や星などの自然界のみならず、偕老を誓った愛妻や慈しんで止まない子や孫である。

雑誌『主婦乃友』に「炉辺の幸福」の題で、文化勲章を受章した新村と愛妻、そして孫の五十嵐櫻氏の写真と記事が掲載された。そこに写る新村夫妻のことを櫻氏は、「この写真の祖母はいつものように和服をきちんと、しかもゆるやかに着こなし、豊かな白髪を結い上げ、その横顔の美しいこと。祖父が惚れこんだのも尤も⁽³¹⁾」と述べている。その記事と写真を見るに、火鉢を囲み、愛妻を見て優しく微笑む穏やかな新村の眼差しから、新村家の家族団欒の様子がうかがえる。また、新村恭氏は、「実際の祖父は、孫を愛する好々爺⁽³²⁾であり、『家を訪れた孫の言動について詳しく綴った『愛孫日記』をつけていたほど⁽³³⁾」であったという。

吾妹子と位置を定めて植ゑさせし泰山木をみれば憶ほゆ⁽³⁴⁾

日うらからか妻から孫らまどあして吾を慶ぶそのさきはひを⁽³⁵⁾

ひい孫にやさしく書いてやる文句じつにむつかしそのかなづかひ⁽³⁶⁾

特に昭和三十二年九月以降の短歌には、先立って他界した愛妻を追慕した歌が多くなってくる。

亡き妻が耳にいとひしこほろぎの鳴く音はわびしわが寝ざめにも⁽³⁷⁾

冬の夜のふけゆく空にオリオンの見ゆと告げにし妻はいま亡し⁽³⁸⁾

歌の題材としては、自然や家族のほかに『広辞苑』や国語辞書も取り上げている。

新村は、あくまでも中庸の姿勢を守り、『現代かなづかい』には反対するという考えを終生もちつづけながらも、『広辞苑』の自序には、「歴史的仮名遣ひ⁽³⁹⁾」や「現代かなづかい」という仮名遣いに問題が生じない言葉だけを選んで書いているのである。新村には、『広辞苑』の書名が『廣辭苑』ではなく『広辞苑』となってしまうことを知って、一晚泣き明かしたというエピソードがあるという⁽⁴⁰⁾。

広辞苑ひもとき見るにスモッグといふ語なかりき入るべきものを⁽³⁹⁾
 国語辞書いまだヴの音ヴの文字を立てずゝにるをいかにかはせむ⁽⁴⁰⁾
 ニッポンとニホンと称呼共存し共栄ぞする史的現実⁽⁴¹⁾

『広辞苑』の歌には、『広辞苑』の初版にスモッグという言葉が入って
 なかったことを痛恨の極みであるとする歌で、並々ならぬ新村の『広辞苑』に
 対する想いが現れている一首であると言えよう。

このように言語学研究には厳しい新村ではあったが、以下のような歌も詠
 んでいる。

高峰のあめりかだより夕刊に出でし回りに赤き線ひく⁽⁴²⁾
 茶の間なる亡き妻の座に程近くデコのポスター六つ七つ見ゆ 高峰秀子⁽⁴³⁾

この二首は、ともに女優の高峰秀子を詠んだものである。デコちゃんこと高
 峰秀子の大ファンになり、満面の笑みの新村の様子がうかがえる歌である。

五十嵐櫻氏は、「生まれて初めて観る映画のこれも初めて見る主演女優、高
 峰秀子にゾッコンになり、近くのナショナル(デコちゃんがコマーシャルガ
 ル)の電器店から等身大のデコちゃんのポスターをいろいろ貰って来て、茶の
 間に坐った祖父の囲りはデコちゃんだらけ……。しかも谷崎潤一郎さんが文
 人好きのデコちゃんを伴って訪ねて来られてからはもう夢中……。⁽⁴⁴⁾」と述べて
 いる。

高峰秀子はそのときの様子を事細かに「神サマのいたずら」に書いている。
 「新村博士の、水茎の跡うるわしく、光源氏の如きテンメンたる歌入りの書面
 と、私のカナクギ流マンガ入りの手紙がいたりきたりするうちに、とうとう、
 といつてはへんだが、八十三歳の光源氏と三十四歳のやくざ女優は対面せざ
 るを得ないハメになった。仲をとり持ったのはイタズラ神サマの代理人である、
 現身の谷崎潤一郎⁽⁴⁵⁾」であった。

「上がりかまちの正面の壁に、私の等身大よりもっと大きなナショナルの色
 つきポスターがビロン! と下がり、ニタツと歯をムキ出した私の顔がこっち
 を向いているではないか」、「そのポスターの、ちょうど私のオッパイのあた
 りに頭が届く寸法で和服姿の新村博士がこよなく優しい微笑を浮かべて、私

たちを迎え」たのは、「五尺に満たない小柄な身体の上に、内裏籬のように色
 白、繊細、端麗な顔が乗っている美しい男性⁽⁴⁶⁾」であった。「博士は、ヒヨヒヨ
 ヒヨッ、と書齋へ足を運ぶと、私の写真の谷間に埋もれたような書きものの机の
 前に、チンと座って『エへへ』と笑ってみせた⁽⁴⁷⁾」のである。

新村は、「女優さんと私」の中で、「茶の間の、元来は妻の座であった席の
 壁上に、大中小、種々の美容が微笑を以て常住この寂しき学究を慰めて」くれ
 たので、読書に飽きて退屈したときに、それらの肖像を仰視すると、「とみに
 精神が回復してくるのがうれしい」と述べている⁽⁴⁸⁾。この「茶の間の、元来は妻
 の座であった席の壁上に、大中小、種々の美容」とは、前述の短歌「茶の間の
 亡き妻の座に程近くデコのポスター六つ七つ見ゆ 高峰秀子」、すなわち今
 は亡き愛妻が座っていた席の近くにある大中小あわせて六七枚のポスターに描
 かれた高峰秀子のことであろう。

新村の短歌から、以下のことが言えよう。

新村恭氏は「スロー・バット・ステディ」は我が家の『家風』といつても
 いい」と述べているが、新村の短歌も同様である。つまり、前述のように、新
 村の歌道の歩みは、「休み休み、ぶらぶらしながら」、しかし「自省」あるい
 は「自判」し、「己を知り、己を恃み」、「独歩、独楽」、「孤負もせず、和
 協をもつぱら」としており、新村は中庸の姿勢を守り、「善良なる平凡人た
 らんことを期するだけ」という、一貫した信条を持ち合わせていたのである。土
 岐が述べているように、新村はその信条を表すために、つねに四恩を説いて、
 その体得のうちに、不断の努力をかさねているのである。

また、新村の短歌は、『古今和歌集』からものの感じ方やものの見方を得て
 いる。歌題に選んだのは、草花や星などの自然界のみならず、偕老を誓った愛
 妻やこよなく愛した子や孫であり、大ファンの女優の高峰秀子であった。

言語学・国語学研究の大家であり、『広辞苑』の編者である新村出には、学
 問の大家であることから、堅くて厳しいというイメージを世間一般からもたれ
 がちだが、新村が詠んだ短歌からは、自然界を愛する穏やかで温厚な面、争い
 を好まない中庸を守る面、また家庭的な、好々爺ぶりを披露する面、さらには
 女優の大ファンになるというユーモラスな面がうかがえるのである。

三 やまぐち生まれの新村出

やまぐち生まれの新村出を研究する契機となったのは、平成十九年度徳山大学地域文化講座「『広辞苑』の編纂者 新村出」の講師を依頼されたことである。これまで新村出といえ、言語学者・国語学者であること、『広辞苑』の編者であること、それ以外は出の命名の由来を知っている程度であった筆者は、やまぐち生まれの新村出という側面から研究を始めたのである。

(一) やまぐちの想い出―山口町道場門前・防府町三田尻―

新村の命名の由来については、「私の生れ故郷山口を偲ぶ」に記載されている。すなわち、「父は私が生れた明治九年の春に山形から轉任して来た。山形から山口へ来たといふので山の字を重ねて、私の名を出(いづる)と命名されたことは、よく私が人に語つた所である。そして親戚の老人が、それに因んで後年號を重山と附けてくれた」とある。『新村出全集』第十四巻随想篇Ⅳにおいても、「わが生涯を顧みて」や「回想十話」(「命名の興味」)など随所に出の命名の由来が記されている。

新村は、『婦人之友』第三十四巻第六號(昭和十五年)の口繪「私の郷里」に「私の生れ故郷山口を偲ぶ」と題して、やまぐちについて記述している。少し長くなるが、以下にその抜粋を示す。なお、掲載写真は、残存する新村出自筆原稿「私の生れ故郷山口を偲ぶ」(婦人之友社所蔵)である。この自筆原稿は、運良く、婦人之友社に所蔵されており、一部欠損しているものの保存状態がよい。なお、自筆原稿の写真的掲載については、婦人之友社に許諾を得ている。

私の生れ故郷山口を偲ぶ

私の生れ故郷は山口である。明治九年の十月恰も萩の亂が起る少し前に、その道場門前町に生れた。東北から西南に走つて湯田や小郡の方へ向ふ山口の中央街路の真中から少し南にはづれた所に、一之坂川といふ小川が南下して天神川すなはち榎野川といふのへ注ぐが、その小川が道場門前町を横切るところの川沿ひの屋敷、その橋の袂の左詰めの家が、私の生れた家であつた。向ひの家は印判屋であつたことだけ覚えてゐる。その店の

の前にはよく遊びにいつて可愛がられたことを覚えてゐる。後年その地を尋ねていつて夢がさめたのであるが、その小川はもつと大きな川であつたと記憶してゐたのであつたが、せまくて而も浅い小川であつたのが不思議でたまらない。もつと水が澤山あつて、桃太郎の桃が流れて来たのもこの川であつた様に感じる。川沿ひの家であつたから、白い塀の程あたりの處から川へ下りてゆけたので、お婆さんが洗濯をして桃の流れ寄るのを拾つたのは、どうもこの川のふちのその邊だと思へてならない。後までも桃太郎の話をしきくと、きつとその川が眼に浮んだものだ(写真1、写真2)。

私はこの生れ故郷では、當時の小學校に一年位はゐた筈で、六歳のとき、明治十五年に父の轉任と共に東京にもどり、それから下總の佐原や静岡などと轉々した。然し六歳までを

すごして、ほんのほんやりした記憶しか残らない山口の地が、ぼおつと夢か霞のやうに展開するのが、私にはこの上なくなつかしい。その後四五十年して二度め三度めに道場門前の橋上や屋敷の門前に立つて、人の撮つた寫真を母に送り届けたこともあつたし、末女が三田尻出身の人に嫁ぎ、共に私の生家の門前をおとづれて、橋上立つ末女をカメラに収めた様なこともあつた。(写真3)

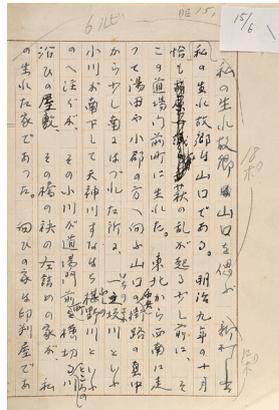
【写真3】



【写真2】



【写真1】



新村出自筆原稿「私の生れ故郷山口を偲ぶ」(婦人之友社所蔵)

新村が生まれたのは、山口町（現在、山口市）道場門前で、生家（元の安部本陣）の近くを流れる川は一の坂川、生家のほど近くに架かる橋は現在の安部橋であると思われる。

年譜によると、前述の末女（次女）新村洋子氏が防府町（現在、防府市）三田尻の福田恒甫氏の長男正氏に嫁いだのは、昭和八年（一九三三）五月七日で、翌年の昭和九年（一九三四）十月中旬から下旬にかけて、新村は福岡に出張し、その帰途三田尻に宿泊している。前年に防府の三田尻に嫁いだ洋子氏の新居に宿泊し、安部橋で洋子氏をカメラに収めたのではないかと思われる。前述の五十嵐櫻氏は、洋子氏の長女である。

年譜によると、新村がやまぐちを離れてから、ふたたびやまぐちを訪れたのは、以下の三回である。

①大正六年（一九一七）五月初 鹿兒島から長崎に入り、古社寺旧史蹟を巡歴し、その帰途、十二日に山口に立ち寄る（四十二歳）。新村は「五十年前の回顧」の中で、「大正六年の初夏私はほんの半日間山口に遊び図書館に訪書し旧宅趾を回顧しなほまた毛利公の名苑に故人渡辺蒼吾翁と佐野友三郎氏に導かれて懐旧の情を縦ま、にすることを得たことがあった」と述べている。

②昭和二年（一九二七）十月 福岡の帝大図書館協議会に出席し、鹿兒島で開催された全国図書館協会大会及び西郷南州五十年祭に列席。その後山口に寄り帰洛する（五十二歳）。

③昭和九年（一九三四）十月中下旬 帝大図書館協議会大会に出席のため福岡へ出張。帰途長府尊攘堂、萩の史蹟及先考遺蹟を訪ね、防府三田尻に宿泊する（五十九歳）。

生れた家の記憶は、こんな断片の二つ三つしかない。いや、まだ一つある。父（關口隆吉）が地方官であつたから、年に一度くらゐ上京する、東京へ連れていつて貰ひたくて堪らなかつた。五つ六つのころだろう、大分せがんだと見えるが、同伴が出来なかつた代りに、小さな机を一つ貰つた。この机は幸にも六十年間も保つてゐて、今もこの書齋の坐右に書物などを載せる臺に使つてゐる。

これは、新村が六十五歳の、大正十五年に、前述の『婦人之友』に掲載されたものであることから、実父隆吉に買つてもらつた小さな机は、百四十年近く経過した今も、重山文庫内に復元された書齋に置いてある。この文机は、新村が亡くなるまで九十年近くも使つていたことから、父親に買つて貰ひ宝物のように大切にしていた思い出の机であることがわかる。下の写真は、重山文庫内に復元された書齋にある文机と松かさである。重山文庫の許可を得て、安光が撮影した。ほかに重山文庫には、新村がこの世に生を受けたときに着用していた産着も保管されている。



新村出の文机（重山文庫所蔵）

こうとく様（字は不明）のお祭りに、（中略）

娘たちも皆ピラ／＼をつけて、おふりそででねこじやらしに帯をしめて、芝居のお姫様のやうに着かざつておまゐりに行く。私と出は、いつも女中共につれられて、諸方へ行つたが、どこへ行つても、令様のポチサマとゴモジサマ（ポチサマとは坊さま、ゴモジサマとはお嬢様）で大切にされた。外郎屋へ行つた時などは、まるで若君姫君でもお成りになつたように気はずかしかつた。外郎屋は大きな家で店の右手に門があつて、私共が行つたら大門を開き奥坐敷へ通し、床の間の前に錦の座ぶとんを置いて、出と私が出ると家の主人と主婦が挨拶に出て来て次の間で礼をする。きれいな女が高坏に外郎を盛って、目八分で持つて来て前へ置いて下ると云ふ尊敬ぶりであつた。これも父上の御功績とお徳のたまものであつたのである。誠に夢のやうな追憶である。

これは、「姉の手紙」の一部で、ここに登場する外郎屋は、福田屋（山口町御堀）のことである。着飾つた姉と新村が福田屋に出かけ、主人などに歓待された様子が記されている。

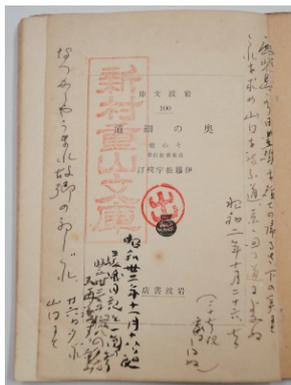
(二) 同郷の因縁―種田山頭火―

新村は、種田山頭火に関する著書の序文を三点書いている。一つ目は、『あの山越えて』の序文^⑧である。新村は、山頭火と同郷であるということから、山頭火への親愛感が強くなったと記している。以下は、『あの山越えて』の序文の抜粋である。

私は山頭火の郷土とは近い周防の山口に生れた。何十年まへになるのは知らないけれども、山頭火と同郷人めいた一種の關係が、一層彼に向かつて私の親愛感をつよくしたことは争はれなかつた。

同序文には、大山澄太氏から序文を頼まれた数日前、岩波文庫の『奥の細道』のトビラに書いた即興の一句が目にとまったことも記している。また、やまぐち付近で読んだ『奥の細道』、「故郷やまぐち」、「同郷（やまぐち）の種田山頭火」、この三者が「妙な靈通」で結びついていると、新村は記しているのである。（この『奥の細道』が重山文庫に所蔵されていることが判明したので、重山文庫の許可を得て、安光が撮影した文庫本の写真も併せて掲載する。）

妙な靈通で、大山さんから、この序文を頼まれた数日前のこと、偶々奥の細道を見る必要が生じて、岩波文庫本の架上から、その本を取出して明けてみたところ、その本のトビラに、右がはに、昭和二年十二月二十六七日と録して、「鹿兒島より日豊線を経ての歸るさ、下の關にてこれを求め、山口を訪ふ道、京に回る道によみぬ」と附記し、その左がはに、「なつかしやうまれ故郷の初しぐれ」と即興の一句をかき、「二十六日夕ぐれ山口にて」と註してあるのが眼についた。山口にその後「年たけて」再遊したことは憶えてゐるが、奥の細道を、馬關で買ってこ



新村出による『奥の細道』トビラへの書き込み(重山文庫所蔵)

んな文句を萬年筆で書いたことは全く忘れて居たのである。山頭火が山口あたりの行乞は何年幾度目かは今すぐしらべることは出来ぬが、此度その紀行文が單行されるので、早く讀むのをたのしみにしてゐる。

二つ目は、「山頭火を愛読して」^⑨である。新村は、山頭火によって、新傾向や自由律の俳句の本質を知る機会となったと記している。山頭火の句や紀行文に散見する地名にも親しみが感じられたという「宿縁」や「前世の因縁」から、次第に山頭火に引きつけられていった新村は、『広辞苑』に山頭火の項目が未掲載であることを痛恨に堪えないと記している。以下は、「山頭火を愛読して」の抜粋である。

山頭火は、明治九年（一八七六年）私が生れた山口市とも遠からず、彼が昭和八年（一九三三年）以来、私の深い姻戚地になってしまった防府（三田尻）の生れであることや、五つ六つの幼時に私が知った湯田のことや、それやこれやで句や紀行文に散見せる地名にも親しみが感ぜられた宿縁といはうか、前世の因縁といはうか、そんな糸にむすびつけられて、句をも愛誦し、紀行文をも愛読するやうに、次第次第に引きつけられていったのです。実に摩訶不思議といはなければなりません。（中略）

『大耕』によって山頭火を深く認識するやうになりましたが、それらの告白のあと、痛恨に耐へないのは、拙著の『広辞苑』に山頭火のことを忘却したことです。今後の増補版には、ぜひ加へねばならないと注意しますが、最近の明治書院版の『俳諧大辞典』には、約一欄それが出てゐるのはうれしいことでした。

三つ目は、大山澄太氏から依頼を受けて書いた『其中日記』^⑩の序文である。新村は、やまぐちの文学者である種田山頭火ファンの一人になったと記している。新村は、山頭火のことを最初は知らなかったが、作品を読むうちに、山頭火のファンになり、その要因として、山頭火の人柄や句風、それに相まって、山頭火と同郷であることを挙げてゐる。以下は、『其中日記』の序文の抜粋である。

神田神保町あたりの書店で、未だ名も知らない種田山頭火なるものの一随筆を見つけて購入し、何だか心ひかれて、帰洛の途中で愛読に耽つたのが、機縁であつた。その出身が山口あたりで、偶然の同郷たることも、最初は知らなかつた。随筆集や、紀行書や、俳句集を、ぞくぞく愛読する毎に、その人物、その句風、いよいよ自分の趣好に触れて来るに至り、いつしか生れ故郷の回想も手伝つて、山頭火ファンの一人となり了した。

以上のように、新村は、同郷の因縁めいたもの、前世の因縁めいたもの、宿縁めいたものを感じる事によつて、種田山頭火ファンの一人になつたと言つてみたり、『広辞苑』の初版に、種田山頭火の項目を落としていたことを痛恨の極みと言つてみたりもしている。

(三) 前世の因縁—木戸孝允—

新村は、雑誌『ホームライフ』の「書齋と書齋人—(その十三)—」に、「私の書齋」という題で原稿を書いている。新村の京都にある邸宅は、実父関口黙齋(隆吉)が松菊公(木戸孝允・桂小五郎)とは練兵館で同門であつた関係で、木戸の邸宅を譲り受け、移築したものである。まさに、前世の因縁である。その書齋は、最愛の書齋であり、無二の書齋であると記している。以下は、「私の書齋」の抜粋である。

元來この家は明治初年に木戸松菊公が鴨川の西畔に住してをられたころの邸宅、しかもその終焉の邸宅となつたその一部分で、それが大正十二年に今の木戸家の厚意で私に授かり、それを私がこの小山の一隅に移築したものであつた。回顧すれば亡父の關口黙齋が松菊公と同門の關係でもつて維新後推輓にあづかつた前世の因縁も與つて幸してゐるといはゞいへよう。かういふ由緒づきの家なのだが、そこに元來東に面した書齋らしき四疊半の一室があつて私は移築後もそれを書齋にあてゝゐた。(中略)すぐ前方の縁がはや南庭には、數人の孫どもが、國旗を振りくゞ行進曲をうたつて歩いたり、或はスベリ台、あるひは砂遊びに時々喧嘩をする仲裁役を勤めながら、圖書堆裡に埋れて、読み書きに耽るといふ工合。但し讀書には親しみ、執筆には疎くなる一方である。退閑の後にはひたすらこの一室

を最愛の書齋として悠々自適して安住してゐる。東隣に茶の間あつて、菓子をものするに適し、北邊に客室あつて出入にたやすく、電話のかけつけ、ラヂオの苦樂、探し物には老妻を招き、退屈には愛孫を抱く。眞にこれ無二の書齋である。

スベリ台や砂場で遊んでいる孫たちが喧嘩になつたときに仲裁役になる新村、退屈になったら愛孫を抱く新村、探し物があるときなどには愛妻を呼ぶ新村、無二の書齋で、かけがえのない家族に囲まれ、悠々自適に安住する新村であつた。

以上、やまぐち生まれの新村出という側面で述べてきた。前述のように、やまぐちを離れてから、やまぐちを訪れたのは三回である。しかも、やまぐちに生まれて、やまぐちで暮らしたのは、わずかであつたが、やまぐちをモチーフとした随筆から、新村にとつては、やまぐちは忘れることのできない故郷であることがわかる。それは、やまぐち出身の種田山頭火遺稿の序文などに、「同郷の因縁」「機縁」などと記していることからもうかがえる。

四 おわりに

新村出については、言語学者・国語学者としての傑出した業績の面に強い光があつたり、文学者としての面はさほど注目されてこなかつた。そこで、本論文では、これまでほとんど論じられることになつた文学者としての新村出に焦点を合わせて、さらには、やまぐち生まれの新村出という側面について論じてきた。

新村には、『重山集』などの歌集があり、最晩年の十年間の歌だけでも數万首にのぼるといわれている。新村の歌道の歩みは、「休み休み、ぶらぶらしながら」、「しかし「自省」あるいは「自判」し、「己を知り、己を好み」、「独歩、独楽」、「孤負もせず、和協をもつぱら」としており、新村は中庸の姿勢を守り、「善良なる平凡人たらんことを期するだけ」という、一貫した信条を持ち合わせていたのである。

文化勲章の受賞者として、また『広辞苑』の編者として一般に知られている

新村は、学問の大家であるという堅くて厳しいイメージを世間一般からもたれがちだが、新村が詠んだ短歌からは、草花や星などの自然界を愛する穏やかで濃厚な面、争いを好まない中庸を守る面、愛妻家であり、子や孫をこよなく愛する家庭的、好々爺ぶりを披露する面、さらには女優高峰秀子の大ファンになるというユーモラスな面がうかがえた。

最後に、やまぐち生まれの新村出についてである。やまぐち時代を回想した随筆「私の生れ故郷山口を偲ぶ」の中で、実父隆吉が山形（県令）から山口（県令）に転任したことから「山」の字を重ねて出と命名されたことや、随筆「私の書齋」の中で、新村の京都の邸宅は、実父隆吉が木戸孝允と練兵館で同門の関係で維新後推輓に与った「前世の因縁」より、木戸邸の一部を譲り受け移築したものであると述べている。

また、親交の深い大山澄太氏の依頼により、大山編纂による種田山頭火の『其中日記』や『あの山越えて』の序文を書いている。その中で、「同郷めいた一種の関係」や「故郷の回想も手伝って」、山頭火ファンになったとも述べている。

これらのことから、随筆などの随所にやまぐちにまつわる事柄が見られ、やまぐちで生まれ、やまぐちで暮らしたのはわずかな期間であったが、新村にとってやまぐちは、生まれ故郷であり、終生忘れ得ぬ懐かしい場所であったと言えよう。

本論文では、文学者としての新村出とやまぐち生まれの新村出について述べてきたが、今後機会があれば、図書館人としての新村出について論じたいと考えている。新村は、明治四十四年（一九一）十月一日、京都帝国大学附属図書館長に就任した。日本図書館協会の理事を務めており、同協会の名誉会員でもある。この面でも、多大な功績のある新村出ではあるが、論じたものが少ない。他日に期したい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、新村出の孫の新村祐一郎氏、新村恭氏、原夏子氏、新村香代子氏（新村徹氏令夫人）、五十嵐櫻氏をはじめとする新村家のみならず、新村出記念財団重山文庫の玉村文郎氏（前代表理事）および入江貞子氏（嘱託職員）にいろいろとお話をうかがいました。ここに深謝申し上げます。

*本稿は、平成二十七年山口県立大学研究創作活動助成を受けて行った研究成果の一部である。

注

- (1) 改造社 昭和六年。
- (2) 『新村出全集索引』筑摩書房、昭和五十八年、四九五頁。
- (3) 「やまぐち文学回廊構想推進協議会」が平成九年に選定した文学者である。なお、第一部は、「ふるさとの文学者13人プロフィール集」（平成11年3月発行）を改訂したものであり、第二部（50人）は、新たに執筆されたものである。
- (4) 安光が執筆することになった。これが新村研究の端緒となったのである。平成二十五年より平成二十七年まで、山口県立大学研究創作活動助成を受けて、「新村出の図書館論を明らかにするための基礎的研究」を行った。平成二十三年より年に二、三回、新村出記念財団重山文庫を訪問し、新村祐一郎氏（新村の孫）や玉村文郎氏（重山文庫前代表理事）、入江貞子氏（重山文庫嘱託職員）からの聞き取りを行った。
- (5) 草木社出版部、昭和十六年。所収歌数は百首。
- (6) 小山居私版限定七十五部、昭和二十五年。所収歌数は百首。
- (7) 白楊社、昭和二十七年。所収歌数は七百七首。
- (8) 初音書房、昭和四十三年。『群落』、『春水』、『新燈』、『ハハキギ』をはじめ諸誌に発表した作と新村自筆の歌日記から選出している。
- (9) 昭和四十三年四月末。
- (10) 『白芙蓉』あとがき 一一三・一一四頁。
- (11) 「私の歌歴自叙」『新村出全集』第十三巻、二五七・二五八頁。（初出は「白珠」に連載（昭和二十九年一月―三十年三月））
- (12) 前掲、二六三―二六五頁。
- (13) 前掲、二六五―二六七頁。
- (14) 前掲、二六〇・二六一頁。
- (15) 前掲、二八七頁。
- (16) 前掲、二七七・二七八頁。

- (17) 七九七頁〜八〇五頁。
- (18) 前掲、二七九頁。
- (19) 『牡丹の園』九十二頁。
- (20) 前掲、九十四頁。
- (21) 五一二頁。
- (22) 『白芙蓉』(昭和二十九・三十年) 二十八頁。
- (23) 『牡丹の園』一二五頁。
- (24) 前掲 一二六頁。
- (25) 『白芙蓉』(昭和二十九・三十年) 十五頁。
- (26) 「泰山木の歌」『新村出全集』第十四卷 二〇四頁。
- (27) 入江貞子氏から聞きとる。
- (28) 『新村出全集』第十四卷 一二六頁。
- (29) 「追懐」 七十三頁。
- (30) 『文藝春秋』平成二十五年一月号 三三五頁。
- (31) 「祖父、新村出の思い出」『泰山木』十頁。
- (32) 前掲注(30)。
- (33) 『春水』八巻六号 昭和三十八年六月。
- (34) 『白芙蓉』(昭和二十七・二十八年) 七頁。
- (35) 前掲(昭和三十九年) 九十頁。
- (36) 前掲(昭和三十二年) 三十五頁。
- (37) 前掲(昭和三十二年) 三十六頁。
- (38) 紀田順一郎「Ⅹ 辞書の年輪 新村出と『広辞苑』」『名著の伝記』(東京堂出版、一九八八年) 二六八頁。
- (39) 『白芙蓉』八十六頁。
- (40) 前掲 八十七頁。
- (41) 前掲 八十四頁。
- (42) 前掲 四十五頁。
- (43) 前掲 七十三頁。
- (44) 『泰山木』 十頁。
- (45) 『わたしの渡世日記上』朝日新聞社 昭和五十一年 一五八・一五九頁。

- (46) 前掲 一六四頁。
- (47) 前掲 一六六頁。
- (48) 『新村出全集』第十四卷 一七〇頁。
- (49) 「兄新村徹のこと」『泰山木』 七十頁。
- (50) 『婦人之友』第三十四卷第六號(昭和十五年) 口繪。
- (51) 『新村出全集』第十四卷 一七〇頁。
- (52) 前掲注(49)。
- (53) 前掲。
- (54) 『新村出全集』第十一卷二十七頁。(大正十五年十二月稿(初出は『防長新聞』昭和二年一月一日))
- (55) 前掲注(50)。
- (56) 「姉の手紙」『新村出全集』第十二卷(昭和十五年八月、新稿) 一二三頁。
- (57) 白外郎商である福田屋を御堀堂が継承。福田百合子山口県立大学名誉教授(中原中也記念館名誉館長)は福田屋の子孫。福田氏によると、ここに登場する主人は、福田氏の祖父福田文吉郎であるという。
- (58) 種田山頭火著 大山澄太編 和田書店 昭和二十七年。
- (59) 大山澄太『俳人山頭火の生涯』アポロン社 昭和三十二年。
- (60) 前掲三・四頁。
- (61) 編著者 大山澄太 アポロン社 昭和三十四年。
- (62) 前掲一・二頁。
- (63) 『ホーム・ライフ』八月號 第四卷第八號 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社 昭和十三年八月一日。
- (64) 天保四年(一八三三) 六月二十六日(明治十年(一八七七) 五月二十七日 山口県出身 桂小五郎 松菊。
- (65) 三戸岡道夫・堀内永人『初代静岡県知事 関口隆吉の一生』(静岡新聞社 二〇〇九年) には、「木戸孝允は、齊藤弥九郎の練兵館道場で、隆吉とは兄弟弟子」とある。

Izuru Shinmura's Life as a Writer: Tanka Poems and Connections with Yamaguchi

YASUMITSU Hiroko

A strong light shines on Izuru Shinmura's illustrious achievements as a linguist and scholar of Japanese, but his achievements as a writer have not received so much attention. The focus of this paper is therefore on Shinmura's seldom-discussed career as a writer, and particularly from the aspect of his having been born in Yamaguchi.

Shinmura is generally well-known for having been a recipient of the Japanese Order of Culture and as the editor of the *Kōjien* dictionary. The general public probably imagines him as being an inflexible and strict academic giant, but the tanka poems he wrote show his gentler side, with his love of ornamental plants and the natural world, his dislike of conflict and desire to preserve moderation. He was a devoted husband, and loved his children and grandchildren, which shows that he was a kind old man. His admiration for actresses is indicative of his sociable nature.

Although Shinmura was born in Yamaguchi it seems that after he left, he only returned to Yamaguchi on three occasions. Notwithstanding his only having lived in Yamaguchi for a very short period, the fact that he wrote an essay using Yamaguchi as a motif indicates that, as far as he was concerned, Yamaguchi was his birthplace and it can be said that it held an unforgettable nostalgia for him to the end of his life. Evidence for this is also shown in the preface he wrote to the posthumous writings of Yamaguchi writer Santōka Taneda. Shinmura wrote that, "We share a connection with the same place", and "He helps me to reminisce about the town where I was born".

